



秋田・新潟 連合チームで参戦

新潟は単独チーム編成不可能な

5月24・25日(木・金)、東京大井ふ頭中央海浜公園・野球場で第16回国労東日本野球大会が開催されました。

新潟・秋田連合チーム準優勝



国鉄新潟

NO. 946
発行
2018年
6月6日
国鉄労働組合
新潟地方本部
発行責任者
加藤 秀夫
編集責任者
教 宣 部

国労東日本本部 第16回野球大会開く

事から参加断念を決めてましたが秋田地本も事情は同じく、エリア本部からの要請で秋田・新潟連合チームで参加、秋田6人・新潟6人・支援者4人の新たな形式で参戦しました。

22×2の水戸に圧勝

第一試合は24日、水戸地本との対戦。永遠のライバルチーム？として4年前のリベンジに燃える水戸地本に連合チームは、先発P新潟・加藤選手



を立てました。初回はエラー絡みの1失点で切り抜けると連合チームの攻撃は

第二試合は 優勝候補の長野地本

相手のWヘッダー疲れと支援者の適時打等で大量12点を奪い、ゲームの主導権を握りました。3回裏でも4番、新潟・中沢選手の適時打等で大量10点追加し水戸地本の士気を奪い取りました。結果は22×2の圧勝、先発・加藤選手は4回を自責点1の完投で期待に応えました。

初回3点先制する

初回表、エース温存のスキを突

第二試合は25日、優勝候補・長野地本、先発P新潟・エース長谷川。じゃんけんで勝った長野は後攻を選び、尚且エースを温存する早くも決勝戦を意識した戦術に連合チームは発奮し、ベンチ内で「絶対勝つて、俺たちが決勝戦に行つてやる！」を合言葉に皆が勝利に向かって団結しました。

8×5で逃げ切る

エース長谷川選手のピッチング内容を見て長野は2回途中でエースを急遽投入したが、連合チームの勢いと戦術・団結力が2回2得点。

き单打と四球を絡めて3点を先制。初回裏を守り、変幻自在エース長谷川選手の投球とバックの固い守備で「0」に抑え上々の立ち上がりでした。2回表、四球連発する長野Pと



3回3得点を奪い、投げてはエース長谷川選手が4回途中2失点に抑え、クルーザー秋田・山本選手が4回の攻撃を「0」で切り抜けました。最終回、長野が猛攻を浴びせ優勝候補の意地を見せたが山本選手の頭脳的ピッチングで3点に食い止め、5回90分を8×5で逃げ切りました。



北海道の鉄道の再生を考える③

○同じ公共交通なのになぜ違う？

自家用車・バス・トラック・船舶・航空機は民間運用でありながら、使用する施設(道路・港湾・空港)は国の責任で維持されています。JR北海道は政府が所有者であるにもかかわらず、施設(軌道・トンネル・橋梁)の所有・管理と車両保有・運行を一体としてJR北海道に任せています。鉄道は、公共的インフラとして国の予算で整備するべきではないでしょうか。

北海道開発事業は、これまで道路・港湾・空港に多くの国費を投入し、建設・維持してきました。しかし、鉄道に関しては、開発予算の項目がありながら、予算は全くつけられていません。

- 日高線や根室線の一部は、いまだに自然(台風)災害で復旧のめども立たないまま放置され、不通になっています。
- 軌道などの「下」を公共的インフラとして国が責任を持ち、「上」はJR、民間企業、自治体などが運用するシステムを！

(北海道の鉄道の再生と地域の発展をめざす全道連絡会)

決勝戦は仙台地本

決勝戦は前回準優勝の仙台地本、ブロック全勝同士の対戦となりました。ルールは時間無制限・コールドゲーム無しの7回戦で、秋田地本は15年振りの決勝戦、新潟地本は初3試合を戦う大会になりました。

初回・1点を先制



先行は連合チーム。初回、相手の疲れとミスを突く走塁で1点を先制しました。

初回の守り、先発P新潟・加藤選手は人生初の連投で肩・指先の違和感から四球を連発し、チームの連戦疲労・暑さ・老化？も加わり、リズムを崩し4失点の苦しいゲームとなりました。

2回の反撃に期待し塁上を賑わしたが、仙台Pがリズムを取り戻しスコアボードに「0」を刻みました。

四球の連発 1点差まで詰め寄る

すると3回の攻撃で仙台・先発Pが疲れから四球を連発して交代しました。

代わったPから秋田・佐藤選手の適時打を含む猛攻で4点を返し、1点差まで詰め寄りしました。

これに発奮した加藤選手は、3・4回の相手攻撃を1失点に抑え4回の守りでは4・6・3のWプレーを決めるなど決勝戦に相応しい好ゲームを展開しました。

5回表、秋田・佐藤選手のヒット

キャプテン加藤のコメント

○前大会、自分の不甲斐無い投球でチームに迷惑掛けた事が、「自分を変える」出発点でした。大会1ヶ月半前から職場グラウンドバックネットに壁投球をし、体と相談しながら自己努力した結果が連合チーム準優勝と個人賞部門の敢闘賞を受賞出来ました。

それ以上に嬉しかったことは、連合チームでの参加を認めてもらい野球大会に出場機会を与えて頂いたこと、連合チーム及び野球大会参加選手にケガ人を出さなかった事です。

大多数の方が略この野球大会でしか野球する機会が無いのに、前大会と同じレベルの活躍をされ、秋田地本の選手に至っては打撃賞、佐藤選手以外はエルダー組員と国労OBでの参加に、新潟地本の選手に勇気・感動を与えて頂きました。

最後に「老骨に鞭を打って」？参加された皆様に感謝します。



を足掛かりに1点を取り、再び1点差まで詰め寄りしました。しかし、ここまで連合チームを牽引してきた「チームの要」4番中沢選手が2塁上で足を負傷し、交代を余儀なくされました。それと同時に連続優勝の仙台地本はクルーザーを投入し、同点を許さない継投をしてきました。尚2アウト満塁で一打逆転を狙ったが、ショウトフライでチャンスを逃してしまいました。



捕手不在で棄権試合のピンチをクルーザー予定の山本選手が捕手をする事で、試合は継続されました。

5回の守りで不運の打球が続き四球とミスの連鎖及び仙台地本の優勝に掛ける執念から3失点を喫し連合チーム「これまでか」の空気が漂いました。

この様な状況下で負傷した中沢選手がベンチで鼓舞し、69歳チーム最年長の進藤選手が3試合サードでフル出場しヒットを打ち盗塁する姿を見せた連合チームは「もう一度頑

張ろう！」の掛け声で最後の力を振り絞りました。

もう一度がんばろう

6回表、途中セカンド出場の新潟長谷川選手のヒットから四球とエラー絡みで3点を奪い返し、三度1点差となりました。

この頑張りに加藤選手が気迫の投球で6回裏の守りを3者凡退に打ち取り、最終回の攻撃に弾みをつけました。

しかし反撃及ばず9×10の惜敗、連合チームは準優勝でした。

●打撃賞は 秋田地本・佐藤孝仁選手

●敢闘賞は 2試合10イニングを1人で投げぬいた新潟地本・加藤選手が受賞しました。

○参加選手○

- 新潟地本
 - 佐藤昌典・福富雅彦
 - 石川忠雄・中沢達也
 - 長谷川正志・加藤秀夫
- 秋田地本
 - 進藤雄一(国労OB)
 - 山本文英・笹井勉・相田守
 - 村越淳・佐藤孝仁(家族)
- 支援者4名

